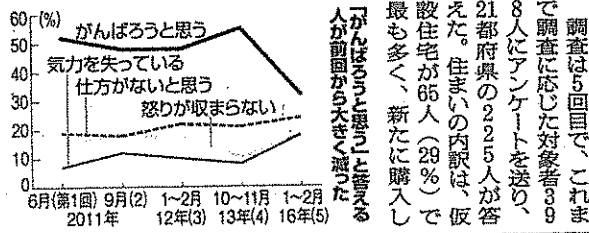


「もう帰れない」38%

福島原発事故 住民に共同調査



朝日新聞社と福島大学の今井照教授は、東京電力福島第一原発事故で避難した住民に共同調査をした。38%が事故前に暮らしていた地域に「もう帰れないと思う」と答えた。5年間に及ぶ避難生活で、帰還への希望が薄れている実態が浮かんた。



調査は5回目、これまで調査に応じた対象者398人にアンケートを送り、21都府県の2,255人が答えた。住まいの内訳は、仮設住宅が65人(29%)で最も多く、新たに購入し「がんばろうと思う」と答える人が前回は大きく増えた。

避難先 孤独感いままなお

賠償で新居 「気が引ける」

東京電力福島第一原発がある福島県双葉町から郡山市に避難した派遣社員男性(42)は深夜、車に乗って以前住んでいた仮設住宅のゴミ捨て場まで行き、家庭ごみを捨てる。市内に家を新築したが、近所の人と会うのは気が引けるという。「賠償金で家を建てたから、何を言われるかと勘ぐってしまう」

昨年10月、以前の職場で、同僚に双葉町から避難中と明かすと、「どうせ賠償金でパチンコばかりやってるんだろ」と言われた。この言葉が心に刺さった。今後は精密機器の組み立て工場に働く。「余計な会話がないから、今の仕事はやりやすい」

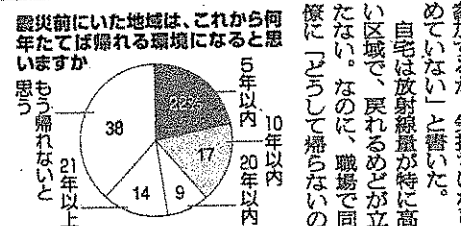
双葉町の南隣の大熊町から埼玉県に避難した会社員の女性(37)は調査に、避難先の人と「たまに話をする」と回答。自由記述で「子ども会などに一生懸命参加するが、気持ちほなほめていない」と書いた。

うになれば帰りたい」が41%で最も多かった。「元のまちに戻らないから帰りたい」が25%で続いた。何年たてば帰れる環境になるかについては「もう帰れないと思う」が38%、「5年以内」が22%、「10年以内」が17%と続き、「21年以上」も14%いた。今の気持ちを聞いたところ、「がんばろうと思う」と答えた人が前回調査(2013年)の55%から32%に減った。「気が失って」いる。「怒りが収まらないう」はともに18%で、いずれも前回より増えた。

「避難先の地域の人たちと話をするようにしたか」という問いには、31%が「ほとんど話をしない」と答えた。「避難していることを言いたくないことがあるか」には、38%が「ある」と答えた。

被災者の声と政策 ミスマッチ

福島大の今井照教授(自治体政策)の話。原発被災者に孤立感が広がっているのは、彼らの考え方や、避難指示解除の時期などの政策とのミスマッチに原因があるのではないかと。政府や福島県は被災者の声を聞き、政策に反映すべきだ。被災者が置かれた状況への理解を深めるため、県内外の自治体や人々にもっと説明が必要だ。被災者が避難先でも避難元でも安定した生活を営めるようにし、まちづくりへの参加を保障しなければならぬ。



自宅は放射線量が特に高い区域で、戻れるめどが立たない。なのに、職場で同僚に「どうして帰らないの?」とも会なごに一生懸命参加するが、気持ちほなほめていない」と書いた。

避難先の人々と良い関係を築けた人もいた。町全体で避難指示が続く富岡町から大田市に避難した望月秀香さん(45)。次女の小学校のPTA役員を引受け、よく話をすることができた。

PTA通じ 友人できた

避難先の人々と良い関係を築けた人もいた。町全体で避難指示が続く富岡町から大田市に避難した望月秀香さん(45)。次女の小学校のPTA役員を引受け、よく話をすることができた。

「?」と聞かれた。避難者として明かすに普通の住民として暮らしたい気持ちもある。一方で、帰れない所があると思われ、原発事故が忘れられるのは悲しい。自由記述で「頑張ろう」という気持ちと足元が不安定な気持ちとで、心のバランスがとれないことがある」とつづいた。

大阪にとまるつもりだが、住民票は富岡町のままにしている。「移すと、福島との関わりがなくなってしまう。ふんぎりがつかないんです」

回答者2,255人のうち、16%にあたる36人は原発事故前の自宅に戻っていた。帰還後の生活を聞くと、「地域の先行きが見えない」と答えた人が多かった。

いわき市に避難していた星智佳子さん(42)は2014年、夫が先に戻っていた南相馬市原町の自宅に幼い息子2人と帰った。

しかし、事故前の生活には戻れていない。自宅は除染済みだが、近所で線量が高め場所の話が出る。不安だ。星さんは「ここに帰るのはリスクを抱えることなんだと思う」。(11日付朝刊の東日本大震災別冊「特集」で詳報します)

増え、友人もできた。長女は高校を卒業し、春から大阪の会社で働く。中学生になる次女はすっかり関西弁だ。「娘たちが帰りたい」と、新居も買った。

「がんばろうと思う」と答える人が前回は大きく増えた。

「元」のまちに戻らないから帰りたい」が25%で続いた。何年たてば帰れる環境になるかについては「もう帰れないと思う」が38%、「5年以内」が22%、「10年以内」が17%と続き、「21年以上」も14%いた。今の気持ちを聞いたところ、「がんばろうと思う」と答えた人が前回調査(2013年)の55%から32%に減った。「気が失って」いる。「怒りが収まらないう」はともに18%で、いずれも前回より増えた。

「避難先の地域の人たちと話をするようにしたか」という問いには、31%が「ほとんど話をしない」と答えた。「避難していることを言いたくないことがあるか」には、38%が「ある」と答えた。

「元」のまちに戻らないから帰りたい」が25%で続いた。何年たてば帰れる環境になるかについては「もう帰れないと思う」が38%、「5年以内」が22%、「10年以内」が17%と続き、「21年以上」も14%いた。今の気持ちを聞いたところ、「がんばろうと思う」と答えた人が前回調査(2013年)の55%から32%に減った。「気が失って」いる。「怒りが収まらないう」はともに18%で、いずれも前回より増えた。

「避難先の地域の人たちと話をするようにしたか」という問いには、31%が「ほとんど話をしない」と答えた。「避難していることを言いたくないことがあるか」には、38%が「ある」と答えた。

「元」のまちに戻らないから帰りたい」が25%で続いた。何年たてば帰れる環境になるかについては「もう帰れないと思う」が38%、「5年以内」が22%、「10年以内」が17%と続き、「21年以上」も14%いた。今の気持ちを聞いたところ、「がんばろうと思う」と答えた人が前回調査(2013年)の55%から32%に減った。「気が失って」いる。「怒りが収まらないう」はともに18%で、いずれも前回より増えた。

3/10 朝日